

202 020 X66

湯川記念館と共同利用研究所

長谷川万吉

この標題の二つの名称は私が言い出したものではない。しかしどちらも出まらざるに私はいつのまにかその同様の中心部に居つたから、その呼び方について責任がないとはいえないようにお氣もする。

昭和二十四年十一月三日、湯川教授ノベル賞授賞の決定という外電が新聞に出た時は日本中が明るゝなつたように思はれた。降休

B4 20.20

202 020 X66

湯川記念館と共同利用研究所

長谷川戸吉

この標題の二つの名称は私が言い出したものではない。しかしどちらも出来上る頃には私はいつのまにかその同僚の中心部に居つたから、その呼び方について責任がなはいとはいえないようにお氣をすす。

昭和二十四年十一月三日、湯川教授ノベル賞授賞の決定という外電が新聞に出た時、日本中が明るゝ存つたように思はれた。降伏

以来四年間、占領軍の命令によつていろいろの改革が強行せられ、その上食糧不足とインフレに襲われて社会は混乱を極め、国民は放心と自信喪失に陥り、前途希望を持ちえなかつた時、この朗報によつて喜んぶのは学者以上に、とりもたず国民大衆であつたようである。湯川さんの関係して居られる機関や学者の団体は凡そ別々に記念事業を計画し出した。京大の計画は、報道と同時に島養学長を中心にした物理の荒

勝、小林兩教授の上つてなつた。私は初

コクヨ

B4 20x20

めには直接の関係はなかつた。向もなく湯川
 記念館という名称の耳に入った。きた。
 湯川記念館に生きた湯川先生かいてもい
 のかある
 「いやそれは湯川教授ノール賞授賞を記念
 する建物という代りに略して湯川記念館とい
 うわけです」
 「別の名では予算がつかないでしょう
 こんな会話をしたりしていたのは、それから
 半年後は、私が湯川神社などという陰口
 を受ける立場に居つたのである。
 二十五年一月に私は学部長にされた。荒勝
 先生の退官があつたりして、いつとはなしに
 私か身養部長の意を受けてこの記念事業の中
 心に近づいて行った。湯川記念館という名も
 使つてあると至極簡明であるから口々に直ぐ
 馴れといった。
 学術会議の第四部会が五、五、五、五、五、五、
 一月六日に京都に開かれた。その席で記念事
 業をすべきであるという提案があつた。これ

コクコ

B4 20x20

に対して若勝会員から京大に於ける計画の概
 要を紹介されるので、部会はその当りこれを
 支持することと定め、翌日茅誠司部会長は
 鳥養学長に面会してその旨を傳えた。更に年
 が明けて一月に~~学術~~学術会議は総会で~~部~~部から
 の提案に基づいて、湯川会員のノール賞授
 賞を記念して、理論物理学を振興すべきであ
 ると政府に申し入れた。これは具体案をつけて
 はいちかかったが、これに依りて物理学及び原
 子核両研連委はこの向題の検討を始め、一方
 素粒子論研究者の一面は協議を重ねていた。
 記念事業として~~学術~~学術振興すべきであるという
 ことはその他各方面で唱えられたが、その内
 容は学同会作とか、発明発見の奨励とか、理
 学とか物理学とかいろいろの主張があつて、
 わろくすると何も具体化しない恐れが気遣は
 れたが、学術会議が理論物理学と限定したの
 で向題が余程すつきりして来た。それでも授
 賞記念の建物と、振興する全口的研究組織と
 ニつかどう関係するかは定つていなかつた。

378

54 20x20



↑ 諸方面からの働きがあったらしい。京大が
記念事業を「独占」してはならないという声か
同かたにたりした
四月頃であつたと思ふが、ある夕方東京の
どこかで、物理関係の両研連委の会合の後で
その主任人々と私は懇談した。この席で、京
大に記念館が出来たら、全口的研究組織の中
心をそこに「附置」するのが最も實際的であ
ると主張したのは私ではなくて、茅、三村、
原田等であつた。話は大体さう定つて、翌日
は大挙して文部省に行き研究課長にそのむね
を申し入れた。この頃素粒子論関係者は相互
連絡の体制を整備することによつて、新しい
構想の全口的共同研究所の創設に對して、有
力を基盤を固めつゝあつた。文部省へも交渉
していったように思はれる。この辺私の記憶は
あまり明瞭でないが、この頃か或いはずつと
後かに新しい研究機関の構想を役人に理解さ
せる交渉に、朝永さん、小林さん、坂田さんなど
何度となく文部省^に足を運んだことと、私は

373

B4 20-20

思っていた。いつか誰かが文部省で説明している筈に
 「それではその研究所には所属の研究員はな
 いわけですね」
 「存くてもよいという訳では、^{有りか}今までの研究所と異な
 り、全国の研究者が計画的にそこへ集まると、
 共同研究をすることもある」
 「二人の会話が当惑あつたと想像される。そ
 れを役人は、所員をつけなくてもよいといふ
 言葉を取つたと考へたらしい。」
 また、当時文部省科研費の中に輸入機械に
 つき、部門があつて、一つの大学が大きな機械の
 輸入を許可され、それを備え付けると、その
 附近の大学には同じ機械は許されない代りに
 機械が明いてる時にその研究者は使はして
 貰ふといふ存つていた。これを共同利用の設
 備といつた。文部省としては新構想の研究所
 をこれと同様に理解したと思はれる。共同利
 用研究所という名詞は文部省側から出した
 と思ふ。その第一号が湯川記念館といふこと

湯川

湯川

になるが、これは決して明いてる時、^{学外者}
 に利用させる機械とは同じではない。その成
 立は、先づ研究者の全口的組織ができて、そ
 の共同研究の場を希望した。湯川教授ノール
 賞授賞記念事業としてこれを要求した。これ
 はどこに出来てもよいのである。ところが丁
 度記念事業として別に京大に建物が出来た。
 これをその共同研究の場とすることは建設の
 趣旨にも沿うので、その名のまゝで研究所が
 具体化して行った。これが湯川記念館研究所
 の成立経過である。この研究所の本質的なも
 のは建物や設備ではなく、研究者の全口的組
 織である。従って「共同利用研究所ではなく、
 共同研究所」と名づけるべきであつた。記念館
 は今や基礎物理学研究所となつてゐるが、小
 規模ではあるが、この共同研究所の理想をよ
 く具現してゐると思ふ。
 これより先、建物の方は京大^{学長}と文部省
 との間の交渉で、初めより^は縮少した規模で了
 解され、その計画についての仕事は^{理学部長}

B4 20 x 20



であつた私を中心として二十五年八月から、
 主に理学部で進められた。その間小林さんを
 通じ、または時に井上(健)さんを介して絶え
 ず湯川さんの意見を聞き、その実現につとめ
 たが、充分とは行かなかった。それでも記念
 館が当時としては新しい点がいり、その注目さ
 れたのは、皆湯川さんの意見によるところで
 ある。実は私は初めは古風な建物を心に描い
 ていた。また共同研究の場としては、何かど
 ろな風に行はれるか、はつきりした計画は予
 め立てる事はむづかしかった。しかるに湯川
 さんからは、各室はロビーに至るまで黒板を
 備え付けるとか、図書室は陳列室ではなく、
 落ちついて勉強のできる研究室であることと
 か、宿泊設備の注文などが来た。湯川さんは
 この建物を記念物ではなく、多く客が来て研
 究討論をする場として、相違にはつきりした
 構想を当時すでに持つておられたようであつ
 た。もっと大きくという注文はなかったのは
 当時の日本の状態でこれに望むのは無理で

湯川

コフコ

B4 20-20



はあつたが、それにしては湯川さんも恐らく
 日本の理論物理学者が現在のように多数にな
 るとは予想されなかつたと思ふ。理論物理学
 の隆興は湯川さんの授賞と、初めて出来た共
 同利用研究所の活動による所が大きいと思ふ。
 建物は経済文部省の記念事業という形で進
 行し、二十七年春まで出来上がった。一方
 研究所の方は既に述べたように学术会议総会
 や、物理学関係研連委の申し入れもかわら
 ず進まなかつた。その間にいろいろの雑音か
 入つた。文部省の内でも、京大が「専断」と
 か「独断」するとか、不快な言葉を聞かされたり
 し右一面、理論物理学者の思想傾向が一部の
 人にとにかくいはれたり、同じことか學術会
 議全体が評判されたりした。凡そこの種の雑
 音は学者の要求を政府が拒絶する口実に使は
 れたように思はれる。
 どういう了解であつたか二十六年には翌年
 度概算要求として理論物理研究所案が京大理
 学部から提呈事業の一環として提出されてい

コソコ

B4 20-20

る。全口的構想の整った案であつた。
 二十六年の秋私は就後初めて渡欧した。その前後は記憶がすっかり喪失してゐるが、どの頃という経過をたどつたか、研究所に対する学者側の要求の實質的なものは悉く認められず、われわれは三百五十坪の建物と教名の事務員だけで、講座や部門がなく、圖書購入の費用等に満足にない湯川記念館を、研究所として全口的共同研究の場とわう新しい構想と期待を以つて出発せざるを得ないことになつていた。

湯川記念館規程が施行されたのは二十七年四月十五日であるが、その以前から私は館長の事務取扱者であつたように思ふ。そして小林さんは事業部長、朝永(振一郎)さんは研究部長として、このお二人を中心として理論関係の学者は共同利用研究所の^{運営}隆運管轄ついで熱心に案を練つていた。また全口的有力な物理学者十数名が、これも辞令のない湯川記念館運営委員として協力することを心よく承諾

廿七年の初めには、

して、之は派生研究所をつくるための全口的
 協力体制が出来上つていた。凡この関係者が
 條件に満足してゐるものでは無い。どこでも
 出発点であつて、将来の大発展を期してゐる
 わけであつた。

ここまですべて書いたことをよく理解するに
 當時の社会事情を思い出すに足らない。
 敗戦後悲酸を極めた三年を経て、二十四年頃
 から漸く食糧問題、口の経済差が小さくなる好
 轉の徴を見せ始めた状態であつて、二十五年
 度の口の予算は八千億余り、この向題に關係
 のある文部省文教施設費の中、鉄筋建造物の予
 算は僅かに三億五千万円ばかりであつた(現在
 の百分の一程度)。文部省の記念館建築概算は
 大蔵省に大きく割られ、文部省ではその分を
 科学研究費の中から充てられた。その科
 研費は、政府が学術会議から條理をつくした
 説明と希望を全然無視して、二十五年底におか
 らぬ億圓にとまつた。この政府の仕打ちは
 、多くの期待を以つて充足した学術会議と

コケ

B4 20x20

つて予想しなかつた大打撃であつた。敗戦か
 らま^ち上がる口民に對して、平和的文化の家^の建
 設という合言葉がせめてもの頼りであつた
 日 學術会議の使命もそこにあつた。しかし安
 定化しようとする保守政權は^{財界とくに}この言葉を好ま
 ないばかりか、平和とか文化とか民主化とい
 うま^ちうなことを口にする人々を激視するので
 ち^ちか^ちとさへ思はれた。學術会議から學術振
 興^{普及}や文化の^{普及}に用して政府へ申し入れても
 殆んど無視され^た。財界の有力者達は
 この際、學問や教育に口費の多くを割くことは
 以つての外であると言ひ、政府筋でも學問
 を經濟復興の邪魔になるから當分待つておれ
 といつた態度であつた。研究予算の上昇率は
 物価に取り残されていった。
 公私を問はず社会の到る所で有形無形のもの
 のに對し、理由の有無にかかわらず奪ひ合ひ
 が烈しく行はれた時であつた。少ない研究予
 算も無論その対象であつた。日本最初のノ
 ベル賞が口民に喜びと希望を与へること加大

当初

きかつたのに対して、記念事業は極めて小さく
 出発することになったのは、大きな予算や、
 広い研究分野の振興などの要求を固執すれば
 今述べたような状況の下では、何もかも成立
 しない恐れがあつたからである。かく厳しい
 條件の下で、とにかく小さいなからずつき、
 リした記念事業が出来るとは有力な支援を
 へたのは多くの物理学者であつた。
 全心的に物理学者か、個人的立場を省み
 い、誠意をもつて協力したといふことは、
 日本では最初のことである。以前は何が激
 的なるかがあつて、若い研究者は時には理
 もなく苦しめられたりしたものである。この
 事件を機として、更に二十八年の口際理論物
 理学会を経て、日本物理学界に親和協力の気
 運が通められたことは顕著な事実であつて、
 これもまた無形の湯川記念事業として極めて
 意義あるものと思ふのである。
 私は規程施行以前から館長事務取扱にさい
 ていたようを気がする。それで規程のさい湯

B4 20-29

373



川記念館運営委員会¹⁹何向日かを開くため全口
 からお集まりを致したのが二十七年四月十五
 日であった。午後一時開会しようとする
 大学本部から湯川記念館規程が議題と成るか
 ら評議会へ説明に亙ぐ来たこと、
 お客さん達を清田荘に待たしたま、評議^会に出
 た。問題は記念館運営委員会と大学自治との
 関係^如、学外者委員^になっている^何で、^此
 に議論が盛んに行はれた。私は諮問機関であ
 りて決定権はないと主張し、名称を記念館委
 員会とすることには同意して理解ある審議を懇
 請したのである。幸い服部学長^評初め^議議員諸君
 の了解を得たが、決定するのに夕刻までかか
 り、待たしてあつた諸君に申し訳のないこと
 をしたが、皆よく解してくれて、規程によ
 る委員の人選など相談したと思ふ。
 此れは忘れることの本末ない印象的であつ
 た。其意義ある事件であつた。研究所として
 の記念館の成立は人々の善意によつて協力さ
 れたのである。茅、朝永、菊地、三村^剛、藤

山内

岡、小谷等の諸氏は形式を重視して運営に協
 力されたのであつた。又服部学長及び評議員
 諸氏も形式的な大学自治^{よりも}学問の自由の本
 旨に思いを致されて深い理解を示されたので
 あつた。どちらも表面的な理屈を超えて人間
 相互に心の通う暖かいものを感じられるので
 ある。同じことが学部内の人々についてもい
 える。同じことが多かつた。これは全く湯川さん
 の偉大な業績と由^は満^は徳^はによるのであつた。た
 またまこの仕事にたずさわつた私としては今
 までに幸福であつたと喜ばずにはおられない
 し、今これを書く機会に関係の方々から心から
 の感謝を表明したいと思ふ。

湯川さんに帰つて貰ふようにコンビヤ大
 学と交渉するについても運営委員の諸氏は日
 本物理学界の代表として署名した。この交渉
 も簡単には行かず、初めは併任として了解し
 たように思ふ。

私は湯川さんが帰つて館長になられた事で
 の館長事務と扱つたわけであつたから、私か

コフコ

B1 20x20



最も気も付けた点は湯川さんの意に反しない
ことであつた。建物の設計については既述の
ように連絡が取れたが、共同利用研究所の成
立までの私の言行は一々相談するわけには行
かないので、自分で最善と思ふように行ふ外
なかつた。湯川さんが帰朝されてから話をし
て見ると私の方針は大体に於いて湯川さんの
賛成を得たようで私としては重荷をおろした
思ひであつた。

基礎物理学研究所と改称したことについて

私は全然記憶がない。調べて見ると二十八年
八月四日に基研の規程が施行されてゐるのは
どうもわからぬ。この研究所は普通名詞で
呼ぶべきではない。湯川博士の偉業を稱へる
国民の希望が具現したものであるから、湯川
という固有名詞を取つてはならない。湯川所
長として遠慮されたのであれば、所長を退か
れる場合には更めて湯川研究所と改称するこ
とを私は強く希望する。そして湯川さんには
ここに一生安らかに研究生活を送り、後進を

指導して貰いたい。それが日本の学問全体へ
 影響する所が大きいと思ふ。これは私だけ
 ではなく、記念事業を企て、協力し、その成立
 を喜んだ多数の国民の願ひであると信ずる。
 京都大学に湯川教授あり、基礎物理
 学研究所ありということは今全世界に知られて
 来ている。このことが将来に亘つて如何に京
 都大学を名譽づけ、その名を重からしめるか
 計るべからざるものかある。ところが初めて
 訪ねる外口の学者など、この京大教地の片隅
 にある小さな建物が、その研究所であると言
 つても、果して信ずることか出来ずあろう
 か。研究所として建物、組織及び経費ともに
 最低規準に達してはいないのではあるまいか。
 国家財政の最低の時遠慮しながら創立したま
 まあまり変つてはいない上に見える。何故な
 うであるのか。今や日本は経済成長を世界に誇
 り、世界的行事も次々と引き受け、或は低開
 費口を援助するなどに、千億を単位に巨額の
 費用を国民の税金から支拂つてゐるのに文化



や教育に關する予算は過ぎ去りにさして
 ものか多いのには、憤りを覚えずには
 ない。この研究所を訪ねて来る人も或
 は日本政治を支配する無知と悪徳が、
 学問を嘲笑して見ると見るかも知れ
 ない。昨年の中
 間子理論三十年を記念して外口から
 一統の
 学者が多数参加して、湯川博士を
 圍んでシンポ
 ジウムが行はれたのであるが、
 此等の学者
 の眼に日本人は学問を尊敬する
 ことを知らな
 い民族であると映つたものがある
 とすれば何として
 恥かしい次第である。学問研究を
 自負する京
 都大学としても決して名譽存
 にとはでない。
 日本でも無計画なから巨大科学
 が實現され
 て来たのは喜ばしい傾向である。
 しかし古來
 学問の画期的進歩は他人の業績
 によることか
 多い。これは人間叡知の想像を
 超えた高度の
 治節によつて創造される何かが
 必要なのでな
 いかと思ふ。どんな条件、
 どんな環境かよ
 いのであらうか。湯川さんは
 研究所の外形が
 充より更に重要なものを、
 現在及び遠い将来

...

...

...

...

コソ

B4 20 20



までのためは求めておられるのかも知れない
 と私には思はれる。
 北白川の電車道から農大の門を過つて行く
 道の附近は京大で最も特色のある風景の一つ
 だ、空気も浄化されてるような爽やかな感じが
 する。これは農学部施設の設計や植物園の経営に当
 った諸先輩苦心の作に相違ない。之旅は藝術
 品である。京大に湯川記念館を建てるとはこ
 れ以上の場所はないと思はれた。ただ寸尺の
 土地を惜しむ植物学者の研究熱意を尊重し
 て、なるべく邪魔にならないよう植物園の隅
 に寄せて窮屈に建てたが窓外には全植物園の
 四季の変化が寫し出され、研究に疲れた内外
 からの学者を慰めてくれるものである。今あ
 りの植物学者達はどうか、四階のア
 パートのような大きな建物が我が物顔に植物
 園の要所を領有し、この美しい環境の調和に
 挑んでいってはどうかであらう。
 広い敷地を有さないこの記念館は、物の本
 質を理解しない人々の手で、ますますその周



辺が見らされて行くかも知れない。しかし知
 る人を知るで、この簡素な研究所で静観して
 想を練り或いは討論して互に啓発する人々は
 世界第一流の学者を會めた内外の優秀な研究
 者である。これ等の人々が湯川先生から何か
 を得て帰って行くとするが、この研究所はこ
 こだけのものではなく、全世界に拡張した無形
 の研究所の中心には居なければならない。此
 所に創立以来十五年、訪ねる人は専向家であ
 るとたいとを向はず、湯川先生の人類愛を基
 礎として、真理の探究に専念せられる態度に
 感銘を受けたいものは存じないと思ふ。研究所の
 数は多いが、この研究所に対しては、研究成果
 の量だけでなく、人類の世界像に新しい光を投ず
 るような新理論を期待して上りと信頼
 しているのは私一人ではないと思ふ。
 私は至つて健忘性である。私は過去のことは
 大方忘れ去つてゐる。湯川さんが還暦をた
 ぬいたか、還暦など何でもないから、益々
 健康に益々研究には精勵下さいと申し上げ



たい。何か書けといはれて、忘却の中から
 記憶を拾い集める実験をして見たが怪しい
 所が多い。もし間違つて誰かに失礼なこと
 を書いていゝるとすれば、それは記憶再現の
 誤差によることで、私の健忘性の罪であり
 ます。お許しを願ひたい。

不充分なものであります

11 20-20